

## 更級日記における姨捨

——主題をめぐる一視点——

遠田 晤良

一

更級日記が作者菅原孝標女晩年の回想の手記であることはいうまでもない。孝標女は五十一歳で、夫橘俊通に死別し、寂寥の境涯に沈淪してはじめて我が生涯を回顧し、自叙を編む。自叙形成に至る内的契機は「老残の身にひた寄せる孤独と寂寥の沈淪の境涯を紛らすべく、流れを去った過去とのひそやかな対話を試みよう<sup>(1)</sup>」としたものであったといつてよい。

作者十三歳前後の少女期に回想の基点を置き、夫と死別後の寂寥の日々に至る、ほぼ四十年の歳月を俯瞰するこの日記は、一般に少女期の夢と現実を混同する浪漫的心情から、次第に目覚めていって、終には宗教的なものへと移ってゆく精神の遍歴が描かれているとすることが通念化している。すなわち少女期の物語世界への憧憬、中年期における現実への覚醒、晩年の宗教への開眼と、三段階に辿り得る思想的展開の跡をそこに見出すというものである。

こうした通念的な読みに対して、その宗教意識の不徹底を指摘、

思想の深化や発展は見られないとする論もつとに提出されている。また、構造論の立場からは、作品素材としての「家集乃至歌反古」・紀行文・身边雑記のごとき折々のメモの存在と、それらの補筆統一の跡が指摘され、しかもそれらが、必ずしも有機的緊密性を持たず、ために作品を一貫する明確な主題性に欠けるとも指摘されてきた。直接この日記の主題に言及した論は多くはないが、野村精一<sup>(2)</sup>・宮崎莊平氏・菊田茂男氏<sup>(3)</sup>等の論稿に明確化されている。しかしこれらの論は作品形成の特質を理解するそれぞれの立場を反映し、多少の振幅がある。

この稿はそれらの先学の驥尾に付して、題号が内包する象徴的意味を再考し、主題性の明確化に有効な視点を定めようと意図するものである。

二

更級日記の場合、その題号の命名は必ずしも作者自身の手になる

ものとは断じられない。しかしこの題号が内包する象徴性は、作品主題との密接な連関を想定しないわけにはいかない。

周知のごとく、「更科日記」「さらしなの記」「孝標女日記」とも題されてきた更級日記は、大正十三年玉井幸助博士によって定家自筆本が紹介され、以来その題号である「更級日記」が行なわれるようになった。しかしこれが作者自身の命名になったかどうかは不明である。

またその名義が、本文末尾に近く記されている作者の自詠

月もいででやみに暮れたるをばすてに

なにとてこよひたづねきつらむ

によるとする玉井博士の御説が定説となっている。すなわち、

「この日記の末の方に、夫の死後、ある夜、作者の甥が訪ねてきたとき、「月もいででやみにくれたるをばすてに何とてこよひたづね来つらん」と詠んだ歌が載せてある。作者は老いて孤独な生活に入つた自分を「をばすて」と観じ、「をばすての日記」といふ意を、それに縁ある「さらしな」に含ませて、かく名づけたものであらう。かつ夫の任国が信濃であつたことなども、この名を思ひついた一因であらうと考へられる。いふまでもなく、をばすては、信濃の国更級郡にある山の名で、古今集雑上に、題しらず読人不知の歌「わがころなぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて」の古歌によつて名高い歌枕であり、この歌はまた、をばすての伝説を生み出したほど、遠い昔から、われらの祖先の心に深い感動を与へたものである。その伝説が大和物語に載せられてゐることなどは、あらためていふまでもない。」

のごとくである。

ここには、題号の典拠が推考されていると同時に、この題号の由来が夫の任地信濃にちなみ、大和物語の姨捨伝説に我が境涯をなぞらえ、「信濃守で死んだ夫の思い出に沈む孤独な老婦の日記」という意味を内包するものとして位置づけられている。

明快なこの推考は極めて説得的であり、広く支持され、ほとんど定説化していることは先に述べたごとくである。たとえば西下経一氏は、日記中の「月もいでで」の歌が古今集の読人不知歌に依つたことを指摘された上で、『古今集』では「さらしなやをばすて山」という。更級日記では単に「をばすて」とあるが、やはり「さらしなやをばすて山」の気持である。「をばすて」は作者が孤独の老婆という点を強く考えたのであるが、「をばすて」といっては露骨になるので「をばすて」の枕として用いられる「さらしな」を取つて書名としたのであらう」といわれている。

日記末尾に近く位置する「月もいでで」の歌に典拠があり、「さらしな」が「をばすて」を意味し、作者老境の境涯を象徴するものとして撰ばれた題号であることはほとんど疑いのないことのように思われる。ただし、こうした説は、この題号が作者の命名にかかわるといふことを前提としたものであり、その限りでは推測にすぎないともいえるわけである。

この題号が作者の命名になるか否かはにわかには決し難い問題である。仮りにこの題号が作者の命名ではなく、後人のたとえば藤原定家の発明だとしたならば、「姨捨」という老残のイメージを喚起する「さらしな」を用いることは極めて残酷な命名といわねばならない。

また「さらしな」なる歌枕から「姨捨」を想起することは誰しも良くなし得るところであろうからこうした残酷な命名は到底他人の命名とは考えられない。「更級」なる表記はともかく「さらしな日記」という題号が作者自身による命名であることはほとんど確実なものであると想定してよいであろう。

その点についてさらに推考を重ねるならば、この日記の先蹤である「蜻蛉日記」の場合がおのずから想起される。

蜻蛉日記の場合、周知のごとく、その上巻末尾に

かく、とし月はつもれど、思ふやうにもあらぬ身をしなげけば、こゑあらたまるも、よろこばしからず。猶ものはかなきをおもへば、あるかなきかの心ちする、かげろふのにきといふべし。(日本古典文学大系)

とみずから記したごとく、作者自身の命名になることはほとんど疑いない。大鏡・兼家伝にも

この母君、きわめたる和歌の上手にておはしければ、この殿のかよはせたま・へりけるほどのこと・歌などかきあつめて、「かげろふの日記」となづけて世にひろめ給へり。(日本古典文学大系)

とあることも、自身の命名たることを裏づけている。

また、この題号が依拠するところは、宇津保物語の

かげろふのあるかなきかにほのめきて  
あるはあるとも思はざらん

に依る。岡一男博士が『宇津保物語』の「かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはあるとも思はざらん」の如く、自己の境涯のはかなさを言ったので、この「宇津保物語」の歌によって名づけたと

思われる。」と述べられたごとくである。

更級日記の中には蜻蛉日記についての言及はいっさい無い。しかしそれにもかかわらず、孝標女が、この伯母の手記である蜻蛉日記を読んでおり、それだけでなく自身の手記にも少なからぬ影響を蒙っているであろうことが指摘されて来た。

大養廉氏はこの日記冒頭の

あづまぢの道の果てよりもなほ奥つ方におひいでたる人いかばかりかはあやしかりけむを

と自己を三人称化した表現をとる、いわば自序の物語的舞台設定の発想に蜻蛉日記冒頭の

かくありしときすぎで、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかでよにふる人ありけり

の影響を認め、更に永承元年の、後冷泉帝の大嘗会御禊の当日、周囲の反対を押し切って初瀬に参詣する作者の行動についても、蜻蛉日記の初瀬詣が色濃く影を落していることを指摘されておられる。たしかに更級日記本文中には蜻蛉日記はその名さえ記されていないが、作者は肉親の伯母なる人の手記を読んでおり、蜻蛉日記を通して知り得る伯母の生涯に少なからざる関心を抱いていたと考えられる。更級日記の執筆そのものが、蜻蛉日記に倣ったとは言えないにしても、蜻蛉の影響は更級日記中に深く潜んでいるといつてよいであろう。

蜻蛉日記なる題号が、みずからの命名であり、それが宇津保物語の歌を引く命名であるだろうことは先述した。更級日記の命名が、みずからのものであると断じ切れないことも先述のごとくである

が、しかしそこにはやはり蜻蛉日記の影響を見てとってよいのではあるまいか。更級日記以前、そうした自己の境涯を託した象徴性の濃い題号が、日記としては蜻蛉日記を措いて殆んど他にないことを考え合わせれば、題号の命名においても、そこに蜻蛉日記に倣う姿勢を見ることは誤りではないであろう。

題号の由来、あるいは題号が内包する意味については、玉井幸助氏の推考があり、すでに定説化していることは先述のごとくであるが、この更級日記なる命名に、蜻蛉日記の題号命名の影響があるとしたら、それが内包する象徴的意味に関しても、蜻蛉日記との比較の上に、今少し検討を加えることもあながち無意味なことではないであろう。

### 三

周知のごとく姨捨伝説は「大和物語」に形象化されている。養い親であるをばを、老いかがまっつて後、嫁にそのかさされて山に捨てた男の、後悔の歌を中心に、地名起源説話の形で採り上げられている。

……この山のかみより、月もいとかがりなくあかくいでたるをながめて、夜ひと夜、いも寝られず、悲しうおぼえければかくよみたりける。

わが心なぐさめかねつさらしなやをばすてやまにてる月を見てとよみてなむ、またいきて迎へもてきにける。それよりのちなむをばすて山といひける。なぐさめがたしとはこれがよしになむあ

りける。

(日本古典文学大系)

とあるごとくである。

この説話は後の「俊頼髓脳」には次のようにとりあげられている。

我が心なぐさめかねつさらしなやをば捨山に照る月を見て

この歌は、信濃の国に、更級の郡に、をば捨山といへる山あるなり。むかし、人の、姪を子にして、としごろ養ひけるが、母のをば、年老いて、むつかしかりければ、八月十五夜の、月くまなくあかりけるに、この母をば、すかしのぼせて、逃げて帰りにけり。ただひとり、山のいただきにゐて、夜もすがら月を見て、ながめける歌なり。さすがにおぼつかかなりければ、みそかに立ち帰りてききければ、この歌をぞ、うち詠めて、泣きをりける。その後、この山を、をば捨山といふなり。そのさきは、かぶり山とぞ申しける。かぶりの、こじのやうに、似たるとかや。

(日本古典文学全集)

両者を比較して見ると、一方は歌物語であり、一方は歌語の由来を語ったものである。おのずから態度の相違はあるが、甥を姪にしている点はともかく、大和物語がこの中心歌を、捨てた男の悲しみの歌としているのに俊頼髓脳では、捨てられたをばの悲嘆の歌としている点がすぐに目につくところである。更級日記作者がこの歌に依拠してみずからをばと親するのだとしたら、この俊頼髓脳に記されたごとき伝説の受けとめ方をしていたことになるであろう。俊頼の時代には、特に歌人達の間にあつたこのように理解されていたものであろうか。事実この歌自体は、捨てた男の詠としても、捨てられたをばの詠としても矛盾はない歌であつて、本来姨

捨伝説とは違った場で伝承されてきた歌であることを示している。事実古今集では、巻十七雑歌上に、題しらず、よみ人知らずとして入集しているが、「旅中詠」とみての扱いと考えられる。

大和物語の記述と俊頼髓脳の記述の相違点として特に注意されるのは、そうした点ではなく大和物語中の、「なぐさめがたしとはこれがよしになむありける」という「姨捨」の歌語の意味の説明が俊頼髓脳では特に採り上げられていない点である。俊頼髓脳が歌語の由来を考証的態度で説きながら歌語の意味するところに特に触れないのは、それが目的ではないこともさることながら、歌語の意味するところは、この時代すでに常識化し、歌人達の間にとりたてて粗齷もないということを示していると考えられるであろう。それは俊頼の時代に至るまでの歌文を見れば明らかなことである。

早く「小町集」に次の歌が見えている。

あやしくも慰めがたき心かなをばすて山の月もみななくに

(続古今雑下にも)

大和物語に「慰めがたしとはこれがよしになむありける」と記述されてきた歌語の意味の具体例と考えてよい。躬恒もまた次のように詠んでいる。

更級の山よりほかにてる月もなぐさめかねつ此ごろの空

(新古今恋四)

伊勢にも

さらしなや姨捨山の有明のつきずも物をおもふころかな

(新古今恋四)

という歌があり、更科の山といえば姨捨山であり、姨捨山といえ

「なぐさめかねつ」あるいは「なぐさめがたし」を意味するものとして用いられて来た。

その場合。「姨捨」は「なぐさめかね」る心の象徴であり、「なぐさめがたい」心境の象徴である。そこでは大和物語のをばを捨てた男の立場や、俊頼髓脳の捨てられたをばの境涯との一致や類似は問題ではない。老いかがまって捨てられた老婆に我身をよそえて詠むというのではない。

歌語としての「をばすて」「をばすて山」はすでに姨捨伝説を背後に押しやって、「わが心慰めかねつ」の歌が表現した荒涼無残の心境のみを継承しているのである。その意味では、歌語としての「をばすて」は姨捨伝説、つまり大和物語の物語性の受容であるよりは、古今集の歌として、つまり旅中詠の孤独寂寥の心境歌として受容されているのだといってよいであろう。歌語としての「をばすて」は「慰めかねる心境」の象徴的表現を担うものであり、捨てられた老婆、捨てられたにひとしい孤独な老婆を意味してはいない。

この事情はまた物語世界でも同様である。例えば「源氏物語」では

① 衛門の督は(略)思ふことのかなはぬ憂はしきを、思ひ佗びて、この宮の御姉の二の宮をなむ、得たてまつりてける。下臈の更衣腹におはしましければ、心やすきかたまじりて、思ひきこえ給へり。人がらも、なべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはすれども、もとよりしみにしかたこそ、なほ深かりけれ。慰めがたき姨捨にて、人目に咎めらるまじきばかりに、もてなし聞え給へり。(若菜下)

② 「今宵、かく見捨てて、出で給ふつらさに、来し方・行く先みなかき乱り、心細く、いみじきが、わが心ながら、思ひやる方なく、心憂くもあるかな、おのづからながらへば」など、なぐさめごとを思ふに更に姨捨山の月のみ澄み昇りて夜更くるままによろづ思ひ乱れ給ふ。(宿木)

① は若菜の巻で、柏木(衛門督)が女三の宮の形代として、姉二の宮を妻に迎えるが、女三の宮を恋うる気持ちの満たされぬ有様を、「慰めがたき姨捨」の気持であると表現したものである。

② は宿木の巻に見えるもので、匂宮と夕霧の六の君との結婚が事実となって、中の君が身の上を省みて嘆くところである。「それでも生きながらえてさえたなら……」とけなげに気持ちを慰めようとするけれども、あの「慰めかねる姨捨山の月」が澄みのぼって、あれやこれやいっそうの物想いをするという場面である。

ここでも「姨捨山の月」は「わが心なぐさめかねつ」の歌を引いて、「慰めかねる」心境の表現として生かされている。「姨捨」の境涯にはかかわりなく、単に心境の象徴的表現として姨捨が用いられているわけである。

「狭衣物語」においても「姨捨」の引き方は全く同じ事情にある。

① 我心も慰<sub>レ</sub>侘<sub>レ</sub>び給<sub>テ</sub>、猶「をのづからの慰<sub>レ</sub>めもや」としのび歩きに心を入れ給へれど、ほのか也し御腕の手当りに似る物なきにや姨捨山ぞわりなかりける。(巻一)

② 何やかやと世の物語し給つひでに「あやしう長らふまじき心地のみするを、心よりほかにて過す様などの、すゞろに心苦しく思え待れば」などの給へば「姨捨ならぬ月の光は、ありがたげなる

御心にこそ侍めれど。隔なくだに、うけたまはりなばしも、竹の中にもたづね侍なまし。」(巻三)

③ 思方をも慰められしを、この頃は、姨捨山の月にはあらぬわが心も、きこえやらむ方なくて……(巻四)

「寝覚物語」は孝標女が作者に擬せられもする作品であるが、これを見ても事情は変らない。

① 御とのる所に、こよひもいとさやかにさしいづる月の光をばす、山の心地して、人やりならずいみじく物思はし。

② ありとだにき、てしなぞとおもふよを  
うきにこりずや人につぐべき

「ただ」とばかり筆にまかせてつ、みなくはしりかきたるをめざましく見給ひて「なか御みづから見給ふまじき」とおぼす。さすがに、をばすて山の月は夜ふくるままにすみまざるを、めずらしくつくづく見出し給ひてながめいり給ふ。

③ くまなく昔恋しきけしき見るより、くやしくなりて、ひきかへいみじくなくさめこしらふれど、さだに思ひつづけながめたちぬれば、をばすて山の月見ん心地して、月かげにいとなまめかしくて、岩の上により給へる……

以上のごとく物語世界における「姨捨」の引かれかたは、その殆んどが、「慰めかねる心」を表わす用法となっている。しかし仔細に見れば多少の振幅があるので整理してみると、

一、「慰めがたい心」を表わしている場合

1、慰めがたき姨捨にて(源氏①)

2、慰めごとを思ふに……姨捨山の月のみ澄みのぼりて(源氏②)

3、「をのずから慰めもや」……姨捨山ぞわりなかりける（狭衣①）

4、姨捨山の心地して……いみじく物思はし（寢覚①）

5、なぐさめこしらふれど姨捨山の月見んこちして（寢覚③）

二、「心慰む」ことを表現している場合

1、姨捨ならぬ月の光は（狭衣②）

2、姨捨山の月にはあらぬ我が心（狭衣③）

三、「遁世」を意味する場合

1、姨捨山の月は夜ふくるままに澄みまさるを（寢覚②）

（中君、広沢に隠棲。世を捨てた人の住む里に照る月の意）

こうした用法のうち三の「遁世」を意味する用法は注意する必要があるものの、そのほとんどは「慰め」との関わりで用いられていることが確かめられる。

以上のごとく確かめ得た「をばすて」あるいは「をばすて山の月」の歌文における用いられ方・その意味するところは、「よしなき物語歌のことをのみ心にしめ」ていた更級日記作者の場合も同様であると見なければならぬ。しかし、この日記の題号が作者による命名ならば、通説のごとく亡夫の最終任地に因み、老残の境涯を象徴させたものと見ることに異論があるわけではない。ただそこには、孤独老残の境涯を象徴するのみでなく、歌文に通例用いられたごとく「慰めかねる心境」が象徴的に託されていると考えられるのである。

月もいでで闇に暮れたる姨捨に

なにとてこよひたづねきつらむ

と詠むとき、甥に対して、「月もない真暗闇の姨捨山のように不幸にうちひしがれたこの叔母」と、自分の境涯を姨捨伝説に依拠して訴

えたものであることは事実である。「甥どもなど一所にて朝夕見るに、かうあはれに悲しきことのちは、所々になりなどして、誰も見ゆることかたうあるに」とか「人々はみなほかに住みあかれて、故里に一人、いみじう心ほそく悲しくて」といった記述から、夫の死後は姨捨山のをばと自身を観ずるに自然な、孤独な境涯にあったことは事実である。この事実をもってすれば題号に孤独な老婦の日記を意味させたと見ることは自然である。また不幸に沈む孤独な境涯にあったから「慰めかねる心境」にあるのは当然ということにもなり、上記のことは言わずもがなのせんさくのごとくであろうが、ことはそれほど単純なことでもない。

夫俊通に死別したのは、作者五十一歳の時であった。それは人生が終わりに近づこうとしていた時期に迎えた最大の不幸であった。自己の存在をゆるがす不幸に沈淪して、一生を回顧して書かれたのがこの日記である。自己の存在をゆるがし、一切を瓦解させた不幸に直面し、なすすべもない悲嘆のなかで一生を回顧し、日記する営みは、記憶の彼方から自己をたぐりよせ、現在の不幸に至る原因をまさぐり、悔恨の涙をそそぐ行為であるかのごとくである。

しかし、日記する営みは、それが自虐的にすら見えながらも他の女流の日記がすべてそうであるように現在の不幸に耐え、現在の不幸からの救済を願う行為にほかならない。失われた少女時代への追憶が信仰への無関心に対する悔恨に染められていても、その晩年の理知を超えて、憧憬の美しさをたたえ、たえて実現されなかった夢にささげられた哀歌のおもむきを印象づけるのは、作者自身、過ぎこし方をいとおしみ、還らぬ日々をいとおしむことによって不幸に

耐えようとしているからにほかならない。過去の思い出に生き、みだされなかつた夢を生きたことよって、晩年に耐えること、日記する営みはそのようなものである。

過去を生きる、日記することよって現在の不幸からの救済を求める、それは作者自身日記中に執拗に繰り返した信仰による救済をおのずから否定することにはかならない。「更級日記」の題号に潜めた作者の真実は日記することよってなお「慰むことなき人生」「救済なき人生の記」ということではなかつたのか。その点についていますこし考察を加えてみたい。

#### 四

この回想の手記が作者の晩年「おそらく一箇月間くらいを中心期間において一気に書きあげた作品」<sup>(9)</sup>だとする玉井幸助博士の見解が早く示されていたが、今日では「家集乃至歌反古」・紀行文・身辺雑記のごとき折々の手控えを整理編集し、補筆して統一を図つたものであると見るべきことが、特に構造論の立場からしばしば指摘され、ほぼ定説化している。

日記形成上推考される上記の特質は、歌集・歌反古を素材とする「歌物語の・家集的章段」と折々のメモを整理して綴られたと見られる「散文的章段」とに二大別し得るものの混在として結果している。しかもこれらの章段相互が必ずしも有機的に統一されているといいたいがたい一面を持っている。

犬養廉氏は「日記の構造を通観すると、家集的痕跡の濃厚な文段、紀行的・物語的乃至挿話的な纏りを示す文段が、それぞれ混在、内

容文体とも未整理不統一の憾を免れない」ことを指摘され「構成上・物語的な冒頭にも拘わらず未整理な段階にあり、なお書き継がれつつあつた」<sup>(10)</sup>と見られ、「未完成乃至草稿的性格」の作品であると論じられた。

これに対し「更級日記」の構成の破綻やその未定稿的性格を指摘する最近の動向は、古典美学の枯渇した様式美を過信する結果の言辞ではないか<sup>(11)</sup>とする批判はあるものの、日記末尾の数段、とりわけ、最末尾の一段の贈答歌一対をもってする終結の仕方には、完結感が稀薄で、なお未定稿的性格を強く印象づけている。

作品形成のこうした特徴は、さらにまた、この作品の「主題」把握の困難性として結果している。

「作者は一生を一単位として、これをしめく、るに足る価値を一攫みにしようとしている。そのために性急な飛躍を試みようとしている」<sup>(12)</sup>といわれるように、四十余年にわたる、少女期からの遍歴の跡を、晩年の述懐によつて統一しようとしたものであることは確かである。しかしそこには「性急な飛躍」が存し、作者の統一への欲求にもかかわらず、この日記を統括する主題となると、現在それぞれの視点からさまざま見解が示されているように必ずしも明確ではない。

主題を明確に抽出しようとした最初の論考としては、野村精一氏の次のごとき一文を挙げ得る。

更級日記は何を書こうとしたのか？ または何のために書いたのか？ そのことを作者は、たとえば「蜻蛉日記」の作者のようにはつきりと書き残してはいない。ふつう夫の死後、わが過去半生を反



省した回想記だ、と説明されているのは前記の通りである。それに誤りはあるまいが、テーマは？モチーフは？というところ、やや積極性に欠けるようだ。あえていえば、この主題は「悔恨」ということであろうか。またこのテーマを導き出すモチーフは、作者の晩年の不幸な境遇があつたようだ。「やみにくれたるをばすて」をもたらししたもの、過去半生の無信仰と物語耽読にあつたと作者みずから反省するところに書かれたのがこの回想記だった、と<sup>(13)</sup>いってよからう。

と述べられた。氏はさらに「一人の、平凡な、年老いた女の『過去の対話』が『更級日記』であり、その主題はむしろ『時間』そのものであつたかもしれない」と言葉を継いでいられるが、この作品の主題を明確に「悔恨」と規定された。氏のこうした見解は主題を論ずる場合、無視し得ない説得力を持っている。

菊田茂男氏は

過去との対話によって、失なわれた時間（生）の復原を求めようとするとする動機は、「悔恨と別離による宗教的意識の自覚と東国的なるものへの志向」という主題として「更級日記」の中に具体的に<sup>(14)</sup>措定されることになった。

と述べていられる。

宮崎莊平氏は、これらの主題論を厳密に批判された上で、

私は更級日記の主題を「沈淪の身となつてはじめて自覚した不幸感と悔恨の情」と<sup>(15)</sup>把える。

とされた。氏の考えは「悔恨のみに絞りきることはできまいと思う。夫の生前としてけつして幸福であつたわけではない作者なのだが、夫

の死によつてすべてが崩れ去つたことを知り、底知れぬ不幸感に陥る。そしてこの不幸の因つて来たるところは何かと思ひ巡らす。それは我が半生の非現実的な生活態度であることに思ひ到る。が、それはいまさらどうすることもできぬ。ただ「……ましかば……まし」と悔やまれるだけなのだ。不幸感が悔恨の情を誘発し、悔恨の情がいつそう不幸感を強調する、といった構図が私には読みとれる。」<sup>(16)</sup>というように説明されている。

それぞれの立場から多少の振幅はあるものの、「悔恨」を重視した共通性を持った意見である。特に宮崎氏は「不幸感と悔恨の情」を別決し「不幸感が悔恨の情を誘発し、悔恨の情がいつそう不幸感を強調する」晩年老残の境地を反映した主題の読みとして極めて説得力に富んでいる。

私は基本的に宮崎氏の見解に賛成であり、作者もまた晩年のそうした心境から、自己半生の回想記に一つの統一を与えようとして見ると見ることに異議を持つものではない。それにもかかわらず、作者が更級（科）日記なる題号を自ら選んだ、この日記する営みの中に「悔恨」とのみい切れない重い主題の存在を考えずにいられないのである。

作者は長い自己の半生を回顧し、物語を耽読し、物語世界への憧憬に生きた人生と、一途な勤行に明け暮れるべき宗教的的人生とを対立させ、単純化して把握しようとしていることは否定できない。彼女が一掴みに回顧した人生も、必ずしも一直線ではないけれども、物語耽溺の信仰に無関心な人生から、宗教的的人生へと歩みを進める一生だといつても良い。稔り多かるべき晩年の、夫の死は半生の道

程をすべて否定せずには居られないほどの激しい不幸感と無信仰への悔恨を喚び覚ます。そうした晩年の心境は

むかしより、よしなき物語、歌のことをのみ、心にしめて、よるひる思ひて、おこなひをせましかば、いとかかるゆめの世をば見ずもやあらまし。初瀬にて、まへのたび「いなりよりたまふしるしの杉よ」とてなげいでられしを、いでしままに、いなりにまうでたらましかば、かからずやあらまし。<sup>(16)</sup>

と苦い悔恨の表白となつて、明らかなのである。「よしなき物語、歌のことをのみ心にしめ」た半生と「夜ひる思ひて、おこなひ」を続けるあり得べき人生を対比し、現在の不幸をもたらしした半生の生き方が苦い悔恨を伴つて反省されるのである。

しかしこの悔恨が宮崎氏もいわれるごとく「せんすべない」ものであり、「夫の死にはかならずしも因果律はなく、仏教信仰が日常生活の多くの部面を支配していた当時であっても、これは論理性を欠く、孝標女独特の思考方式」なのである。

こうした晩年の〈悔恨〉に立つて俯瞰された半生は、孝標女自身にとつても、「いまはむかしのよしなしごころも、くやしかりけりとのみ、思ひしりはて」た結婚生活によつて現実に目覚め、堅実な家庭生活に入った中期以降から夫の死というはからざる不幸に直面するまでの人生と、それ以前のいわば青春期というものと大きく二分される人生として捉えられている。連続する過去半生を信仰的生活を軸心に俯瞰していると考えてよい。

その中期の生活が、信仰に無関心であつたそれ以前の生活と訣別して、寺社詣に心を傾ける、人一倍熱心な信仰生活であつたこと

は周知のごとくである。「二・三年、四五年へだてたることを、次第もなく書きつづければ、やがてつづきたちたる修業者めきたれど」と作者自身記すごとく、寛徳二年・作者三十八歳ごろの石山参籠をはじめとして、翌年後冷泉天皇大嘗会の御禊の日をおしての初瀬詣で、四十歳春の鞍馬参籠、十月頃には再び鞍馬へ、それに続けて、再度の石山参籠、初瀬参詣、あるいは太奏へと、「身のやまひ、いとおもくなりて、ここにまかせてものまうでなどせしことも、えせずなりたれば」と記される四十歳頃まで、堅実な家庭の人であると同時に信仰厚い充足した歳月を送つた。

この時期は

なにごとも、心になはぬこともなきままに、かやうにたちはなれたるものまうでをしても、みちのほどを、をかしとも、くるしともみるに、おのづから心もなぐさめ、さりともたのもしう、さしあたりて、なげかしなどおぼゆることどもないままに、

と子供の養育と夫の出世を願う、安定した中期であり、「たのもしかし」と述べられる、〈悔恨〉の対象とはならない人生である。これらうち続く物語では「いまひとへにゆたかなるいきほひになりて、ふたばの人をも、思ふさまに、かしづきおほしたて、わが身も、みくらの山につみあまるばかりにて、のちの世までのことを思はむ」とする現実功利的な祈願に発するもので、切実な魂の救済を願う本源的な信仰心から見れば極めて底の浅いものといわねばならないが、〈悔恨〉はそうした信仰の不徹底を反省、真の回心をとげるといふものではない。この時代一般の貴族の信仰と作者はかけはなれた場所にいるわけではなく、一般的にいつて、人並み以上の信心といつ

てさしつかえなく、〈悔恨〉はこれ以前の、信仰に無関心・無自覚であった時期に向けられている。

〈悔恨〉の対象となる、いわば青春の時期は十三歳の「京にとくあげ給ひて、物語の多く候ふなる、あるかぎり見せ給へ」と草深い上総での祈りの時にはじまり、宮仕えの当初、結婚に至るころまでを含む三十三、四歳ごろまでと考えてよい。この回想記において量的にも後の記述の倍以上の量を占め、最も重要な部分である。物語世界憧憬の夢想的時期から、現実覚醒に至る精神の遍歴の中に、晩年の不幸から発せられた悔恨の念が、一すじの水脈のように尾をひいている。というより晩年の心境による統一の意図がほの見えているといふべきであろう。

(1) 第一は、源氏物語五十四巻ををばなる人から贈られて「後の位もなにかはせむ」とまで、その世界に耽溺した頃。夢にきよげなる僧の「法華経五の巻をとくならへ」とのさとしにも「人にも語らず、習はむとも思ひかけず」と無関心であったことを述懐し、そうした自分を「まずいとほかなくあさまし」と評する。

これは直接的に悔恨の言辞を綴るのではなく、信仰に無関心であった過去の自分を回想の中にとぐり寄せることである。信仰に無関心であった過去の事実の提示は、同時に表裏をなす物語世界への耽溺を語ることでもある。

以下そうした諸段は、

(2) 二番目の夢の記述。皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水を作るといふ人から「あまてる御神を念じませ」と夢告があったが、「人にも語らず、何とも思はでやみぬる」有様だった。「いと

ふかひなし」と晩年からは嘆息される。(14歳)

(3) 浮舟の女君のようにと「あらしごと」を思ひ続けていた頃。「かやうに、そこはかなきことを思ひつづるをやくにて、物まうでをわづかにしても、はかばかしく、人のやうならむとも念ぜられぬ有様だった。(19歳)

(4) 父が常陸に下った頃。「かうて、つれづれとながむるに、などかものまうでもせざりけむ」と悔むが、清水に参籠しても「例のくせは、まことしかべいことも思ひ申され」ぬ有様だった。(26歳)

(5) その参籠中の夢に、別当とおぼしい僧が「ゆくさきの、あはれならむも知らず、さもよしなしごとをのみ」と叱るが、「かくなむ見えつるとも語らず、心にも思ひとどめでまかでぬ」という有様だった。(26歳)

(6) 母が一尺の鏡を鑄させ初瀬に代参に立てた僧が、作者の運命の予兆を示した頃。それに対して「いかに見えけるぞとだに耳もとどめず」という有様だった。(26歳)

(7) 天照御神を念じ申せといふ人ある頃。「そらのひかりを念じ申すべきにこそはなど、うきておぼゆ」という有様だった。(26歳)

(8) 清水参籠の折、前生が仏師だったと夢告があった折。「清水にねむごろにまゐりつかうまつらましかば」「おのづから、ようもやあらし」を「いとふかひなく、まうでつかうまつることもなくてやみにき」という有様だった。(32歳)

(9) 宮仕えを経験し、おそらく結婚した頃のことであろうが、「ものまめやかなるさまに、心もなりはててぞ、などで、多くの年月を、いたづらにふしおきしに、おこなひをも、ものまうでをもせざりけ

む」と反省、「光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは」とよ  
しなかりける心を反省した頃。そうまで反省していながら「思ひし  
みはてて、まめまめしくすぐすとならば、さてもありはてず」とい  
う有様だった。(33歳)

こうした信仰に無関心だった半生が、先述のごとく「むかしより、  
よしなき物語、歌のことをのみ、心にしめで、よるひる思ひて、お  
こなひをせましかば」との〈悔恨〉の対象なのだった。「むかしのよ  
しなし心もくやしかりけり」と反省し、自覚的な信仰生活に入った  
中年期の長い歳月をもってしても償い得ない悔恨の対象なのであ  
る。現在の不幸の遠因が、前半生の無信仰な生活態度にあるとする  
孝標女の総括は、一応その述懐のまま受けとめねばならぬであろう。  
しかし、晩年の「ましかば……まし」とする悔恨の言辞に総括の  
姿勢を見ても、前記のごとき前半生の信仰に無関心であった事実の  
記述に加えられた悔恨の述懐は多いものではなく、またさほど切迫  
感のないものであることに気づかざるを得ないであろう。現在の不  
幸の遠因がこうした前半生にありとする悔恨は、宮崎氏のいわれる  
ごとく「せんすべない」ものであり、孝標女も気づいていることであ  
る。

たしかに前半生の回顧は信仰に無関心であった事実の記録であ  
る。同時にそれは重大な信仰に無関心なまでに深く切実であった物  
語世界への憧憬の深さを語ることもある。信仰生活に無関心であ  
ることと表裏一体をなす物語耽溺の中で育んで来た「あらましごと  
」の深さを語ることにほかならない。「よしなき物語」とそれによつて  
育まれた夢、それ故にこそ前半生は豊かなのであった。「むかしのよ

しなし心」という否定的な言辞を裏切って「あらましごと」故に過  
去は美しく「よしなし心」故にいとおしむべき過去として作者の心  
にもよみがえって来るのである。悔恨という自虐の装いにもかかわ  
らず、現実によってこぼれた夢に、その夢を失ってゆく道程に  
作者の限らない哀歌が響いてくる。

不幸に陥って人は誰しも、それからの救済を願わずに居られない。  
晩年の不運は自分の肉体の衰えと迫り来る死の足音によって、いっ  
そう切実である。宗教に救済を求め得るものは幸いであろう。孝標  
女は天喜三年十月十三日と確かな日時を記して弥陀来迎の夢にす  
がった。憂き人生だったが「このゆめばかりぞ、のちのたのみとし  
ける」と来世の信仰に救済を求めた。信仰に無関心であった前半生  
を悔恨をもって総括し、弥陀来迎に救済を求める図式である。しか  
し、その〈悔恨〉は何ら回心の決意に満たされたものでもない。「よ  
るひる思ひて、おこなひをせましかば、いとかかるゆめの世をば見  
ずもやあらまし」というように「見ずもやあらまし」(こんなはかな  
い境遇にならなかつたのもあろうか)と疑問助詞「や」を介在さ  
せた悔恨は力ない嘆息に過ぎない。「いなりにまうでたらましかば、  
かからずやあらまし」と〈悔恨〉というよりは繰り言のごとき力無  
さである。

この日記の主題を〈悔恨〉に力点を置いてとらえることは、この日  
記を懺悔の書として読むことになるだろう。懺悔の書として読まれ  
る時、その宗教的自覚の不徹底、あるいは回心の明らかな披瀝の見  
られないことが、この日記の主題の不徹底として受けとられかねな  
いのではないか。

天喜二年の夢に救済の希望を吐露するところにあるいは宗教的境界を見出すことができるかもしれない。しかし作者は天喜二年の夢に安心立命を得たのだろうか。否である。もしそうならば、以後の日記末尾は書かれる必要はなかったであろう。否むしろ、この日記自体書かれる必要はなかったであろう。

「あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つ方におひいでたる人」という自己三人称化に見られる「自虐の身づくろい<sup>(18)</sup>」は、その生い立ちに不似合な夢を抱いた人ということであろう。こうした自己の登場に対応する晩年の自己規定は、「かうのみ、心にもものかなふかたなうてやみぬる人」であろう。夫の死は大きな不幸であった。その不幸からの救済を求め、不幸の因由を深めてたぐり寄せた過去は、今さらのごとく「かうのみ心にもものかなうことなくてやみぬる」人生だったとの述懐を強いるものでしかなかった。

過去を振り返って見れば、心満たされた時期は少女期の源氏物語耽読の時を措いて無かった。「後の位も何にかはせむ」という満ち足りた時は「げにおのづから慰みゆく」日々であった。それによって育かれた夢は、「光源氏の夕顔、字治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ」というはかないものだが、現実にはひきあてれば、漠としながらも、結婚と宮仕えに対する夢となろう。

少女時代にあくがれた物語の世界などこの世にあるべきものではないと、自ら夢に訣別を告げるのは実際に宮仕えを体験し、結婚を現実のものとした時であった。「いくちたび水の田ぜりをつみしかは思ひしことのつゆもかなはぬ」とひとり力なくつぶやくほかない。現実には「ことのほかにたがひぬる有様」なのであった。夢想は潰え、

願望が満たされないのは世の中の常のこととはいえ、たえて実現されなかった夢は美しく、回想はその夢に捧げられた挽歌の響きをかみでずにおかない。

物語のこともうちたえ忘られた結婚生活や、たまさかの宮仕えの時期は、「心にはなほぬこともなきままに」という充足の時であるはずだった。再び「おのづから心も慰め、さりともたのもしう、さしあたりてなげかしなどおぼゆることども」も無いと思つた中年期であった。しかし「いまはひとへに、ゆたかなるいきほひになりて、ふたばの人をも思ふさまに、かしづきおほしたて、わが身もみくらの山につみあまるばかりにて、のちの世までのことも思はむ」という願望は、少女時代の夢とどれほどの差があるう。夫の死という不条理な現実によって、たちまちに潰え去る夢想に過ぎなかったのだ。

「かかる夢の世」という時、作者は自分の一生が、夢想とは裏腹のあやにくなものであったとしか思えない。たった一つ残された陀来迎の夢も、少女時代の「あらまじごと」とどれほどの違いがあるう。「心にもものかなうかたなうてやみぬる」人生に弥陀来迎に期待をかける来世の慰めもおぼつかないのが真実であろう。作者は「功德もつくらずなどしてただよふ」と宗教的救済を放棄したところで、この日記を書いている。まさに書くことが救済であり、命の証である。日記するものをひとしく駆りたてた、同じ救済への祈念が作者をも駆りたてるのである。

身の上を日記する行為によって現在の不幸を浄化し、みずから作り出した日記世界の論理にしたがって、生きる場を得ることであるとする日記文学の形成論理が更級日記の場合も例外ではないとい

得る。「日記文学は、これを作品として統轄する主題が何であるかという点もさりながら、そこにつむぎ出される世界の論理の中に、作者の生活の本随がどう証されるかという問題において、その主題がとらえられねばならないのである<sup>(19)</sup>」とするならば、果してこの日記の主題をいかに定位すべきであろうか。

更級日記四十年の人生史は、現実によってそむかれ、潰え去ってゆく夢の歴史である。少女期の物語世界への夢、それによって培われた結婚への夢、宮仕えの場にかけての夢、子への、夫への夢、作者にとつては現実そのものであった慥かなものも、潰え去って見ればひとしく夢に過ぎない。失なわれた夢をいとおしみ、その虚しさを宗教的救済によって償おうとする道程、それが日記世界の論理であり、その論理に導かれて描き上げた人生史である。

しかし、作者にとつてこのみずからつむぎ出した日記世界を生きることが、救済をもたらしたのだろうか。夢の果てに弥陀来迎の夢に行きついた作者はみずから探り当てた日記世界の論理によってその夢もまた虚妄に過ぎないことを納得しなければならなかったであろう。不幸の因由を求めずにはおかないへ不幸感と悔恨の情を内的契機として織りなした生は「おのずから心も慰みゆく」と見たものの虚妄性を証したにほかならない。

救済への切なる祈念が日記する行為に駆り立てながら、日記する行為もまた救済なき生を肯なわせるものでしかない。「慰めかねたる人生」「救済なき人生」の記といふべき暗く重い主題が「更級(科)―姨捨」の記という題号にはひそめられているのであろう。

(昭和五十四年九月)

注

- (1) 菊田茂男氏「更級日記——主題の把握」『国文学』昭和45・7。
- (2) 野村精一氏「源氏物語と更級日記」『国語と国文学』昭31・4。『平安朝文学史』明治書院昭40・4。
- (3) 宮崎莊平氏「更級日記の構造、一、作品の主題と構造」『平安女流日記文学の研究』笠間書院、昭47・10。
- (4) 注(1)に同じ。
- (5) 玉井幸助氏校注「更級日記」日本古典全書・朝日新聞社、昭25・2。
- (6) 西下経一氏校注「更級日記」岩波文庫解説、昭38・8。
- (7) 岡一男氏「道網母」有精堂、昭45・10。
- (8) 犬養廉氏「更級日記臆断」『国語国文研究』昭35・10。
- (9) 玉井幸助氏「更級日記の成立と時代」『国文学』昭32・10。
- (10) 注(8)に同じ。
- (11) 注(1)に同じ。
- (12) 西下経一氏「平安朝の日記紀行」『六更級日記』岩波講座日本文学、昭7・1。
- (13) 注(2)に同じ。
- (14) 注(1)に同じ。
- (15) 注(3)に同じ。
- (16) 「更級日記」本文引用は日本古典全書本による。以下同。
- (17) 「更級日記の作品論補説」『藤女子大國文学雑誌』昭52・4。
- (18) 清水文雄氏「王朝女流文学史」古川書房、昭47・5。
- (19) 秋山虔氏「古代における日記文学の展開」『国文学』昭40・12。「日本文学研究資料叢書・平安朝日記I」所収。